

長島の海に異変が…「赤潮」襲来 ～被害総数 31 万匹～



八代海で発生した赤潮が本町海域にある養殖ブリの生簀を直撃し、平成21・22年以来の深刻な被害が出ました。

管内海域調査で赤潮を確認し、増加傾向にあることから、県が16日に赤潮警報を発令。東町漁業協同組合（山下伸吾組合長）では管内全域で餌止めと粘土散布を実施し、被害拡大の防止を図りました。

23日に鹿児島県、長島町、東町漁業協同組合で赤潮対策本部が同時に設置されましたが、24日に赤潮の細胞数が急増し、一部の生簀でブリのへい死を確認しました。

今回の赤潮もこれまで頻繁に発生したものと同様に「シャットネラ・アンティカ」によるもので、増殖速度が速く広範囲に及び、短期間で大



へい死漁の受入れ



国・県が埋設現場を視察

きな被害へとつながりました。赤潮は、海中プランクトンが増殖し、海水が変色する現象で、魚のえらを傷つけ酸欠にさせるほか、魚毒性によって死に至らせます。6月29日の報告では、養殖のブリ類が26万匹、シマアジが5万匹となっていて、被害が大きく、全容把握には時間がかかる見込みです。

被害が甚大となったことから28日には、国や県の関係者が来町し、特に被害が大きかった幣串地区の現地や死魚の埋設場所を視察。対策会議では、経緯と今後の支援についての協議を行いました。

山下組合長は「町・県・国への要望を行うと共に漁業者が経営再建できるよう支援していく」と話しました。